ワタシの名前は五代目マルモ！
蚕農家のサトウ家を守る由緒正しいネコ！
今日は「猫神様」と言われた初代マルモの話をするからちゃんと聞くように！
それでは始めるね！

蚕の守り神　マルモ （宮城県丸森町）

「アレ！今、キヌん家の方に行ったのは野ネズミ一家じゃなかったか？ヒッポ！」
「へえ！大内の兄貴！　ゴンとチューとショーですぜ。」
「あいつら、また蚕をねらいはじめたな！」
「ほっときましょうよ、兄貴！オレたちオスはあの家から捨てられたんだ。
守り猫になるのはメスだけ。それも首ねっこつかまれて、しっぽがクルーンと
丸くなるやつが選ばれる。あのチビめ！うまいことやりやがって・・・」
「でもなあ、娘っ子のキヌはオレたちが生き埋めにされる所を助けてくれた。」
「そりゃそうだけど・・・だからオレたちノラネコになってしまった・・・」
「とにかく、つべこべ言わずに付いてこい！」
二匹の猫はノネズミたちの後を追う。

　養蚕場の前ではチビ猫マルモが野ネズミたちに向かってうなり声をあげていた。
「オメエがこの養蚕場の守り猫かい？　ご・く・ろ・う・さ・ま！」
「ゴン親分、こっちが桑棚みたいですぜ！蚕室にはまだ蚕は入っていないみたいだ」
とチューが窓からのぞいて言う。
「じゃ、こっちのサナギいただきまーす！」と体の小さなショーが建物の隙間から
無理矢理入り込んだ。桑棚によじ登ると桑の葉の中に顔を突っ込んだ！
マルモも体をくねらせて隙間を広げ、ショーを追いかける。
「オヤオヤ、オレたちのために守り猫マルモ様は穴を大きくしてくれたみたいだぜ。」
ゴンとチューは高笑いしながら中へ入ろうとした時だった。
「ちょっとまちな！」 ヒッポが飛び込んで入り口の穴をふさいだ。
「ゴン、このうちの蚕はやめな！」
「オヤ、だれかと思ったら、大内の兄貴じゃありませんか。お日柄もよく・・・
なあに、私どもはいい天気なものですからお散歩、そうおさんぽなんですよ！」
入り口をふさがれたショーは隣の蚕室へ逃げ込む。
マルモも大きなうなり声をあげて後を追いかける。
そこへ桑畑から戻ったキヌが駆けつけた。　　（つづく）